

ウェブアクセシビリティ 自動分析ソフトウェアの開発と導入

ウェブアクセシビリティ対応への要求と課題

「障害者差別解消法」の施行により JIS X 8341-3:2016 が注目されているが、多くのウェブサイトでは規格への対応目標が達成されていない。*

効率化する手段の不足

問題点の検出や分析には、利用者や専門家による評価を利用する方法が一般的だが、利用者評価では利用者の召集に多くの費用が必要となり、分析含め1か月程度の時間を要する。また専門家でも数十ページの点検で1週間以上の時間を必要とする。

専門的な知識の伝達が困難

専門家や、発注者、開発者間での情報共有が不可欠となるが、JIS X 8341-3:2016 の基準が曖昧なため、評価者の知識などによって評価結果が変わってしまったり、要求される知識の範囲が広いため、複数関係者間の情報伝達が困難となっている。

ウェブアクセシビリティ自動分析ソフトウェア「WAIV」



トップ画面



評価結果 / 詳細画面

WAIV の特徴

問題点の検出だけでなく、分析や報告書の作成を自動で作成する

分析に用いる評価基準が、障害者によるウェブサイト閲覧時の行動に基づいている

効果の検証（WAIV 導入事例：ヤフー 株式会社）



自社コンテンツ開発用 UI 集「UI ライブラリー」

従来、他社ソフトを用いて1日かけて検出していたウェブアクセシビリティの問題を、30分で検出できるようになった。

時間の短縮から、作業効率向上に繋がった



オウンドメディア「Insight for D」

記事を執筆する担当者が投稿した画像などに対し、アクセシビリティ上の問題点を検出し、担当者に報告できるようになった。

作業者間の情報伝達が容易になった

JIS 規格の定義は曖昧なため、アクセシビリティ対応に正解は存在しない
複数手段を組み合わせ、アクセシビリティの信頼性を高めることが重要

*ウェブアクセシビリティ基盤委員会「公的機関におけるウェブアクセシビリティ方針策定と試験結果表示の実態調査（2016年6月）」より